

戦略的創造研究推進事業  
(社会技術研究開発)  
令和元(2019)年度研究開発実施報告書

「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」

研究開発領域

「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの  
確立」

辻井正次  
(中京大学現代社会学部、教授)

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名 .....	2
2. 研究開発実施の具体的内容 .....	2
2-1. 研究開発目標 .....	2
2-2. 中間達成目標 .....	2
2-3. 実施内容・結果 .....	3
2-4. 会議等の活動 .....	10
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況 .....	10
4. 研究開発実施体制 .....	11
5. 研究開発実施者 .....	15
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動等 .....	17
6-1. シンポジウム等 .....	17
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など .....	17
6-3. 論文発表 .....	17
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） .....	18
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等 .....	18
6-6. 知財出願 .....	18

## 1. 研究開発プロジェクト名

「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの確立」

## 2. 研究開発実施の具体的内容

### 2-1. 研究開発目標

研究開発期間の初期においては、(発達障害の大多数となる)知的な遅れがない、もしくは比較的軽度な知的障害を伴う発達障害のある人たちの社会的不適応に関して、実際にプログラムを取り組んでいく地域で実態を科学的に把握し、また、アプリ等の活用状況を把握し、青年成人期当事者と支援者との実際の支援経過や他者との交流のニーズを蓄積し分析していく。そして、アプリ開発においては、活用試験等を挟みながら、発達障害者の日常生活スキルや就労ソフトスキル(職務そのものに関するハードスキルではなく、職場での人間関係等のスキルをソフトスキルとしている)を促進するアプリを開発する。アプリには、発達障害者のセルフ・チェックのためのアセスメント・ツールや他者との交流ニーズを把握し、支援者との状態把握と助言を交換する機能を追加する。そして、そこで得られたチェック内容に関しての分類を医療・福祉両面から分析を行う。本アプリは、近年普及している一般向けの関係構築コンテンツとは異なるものとなっており、発達障害者の障害特性を配慮した機能を追加する。2年目では、支援の経過と日常生活や社会性のスキルの実態を蓄積し分析し、支援に取り組む事業所等での活用を進めていく。3年目以降では、支援ニーズの高い発達障害者に本アプリのチャット機能を活用してもらい、チャット上では支援者も関与しながら、彼らに交流の場を作ってもらい、そして、現実の生活でその発達障害当事者と一緒にグループ活動の場を持ち、一定の関係を築いてもらった後に、福祉的支援や就労や自立支援等につなげていく。また、実際にアプリを提供している間にも、状況に応じてアプリの機能を追加する。ヴァーチャルなつながりから現実のつながりを同期的に提案していく上では、いくつかの現実的な工夫を加えていく。

成果としては、発達障害青年成人の支援者との支援経過と地域でのつながりの実態に関するデータや彼らの関心や余暇の過ごし方等を把握することができる。また、支援において有効な、スマホ等を活用した新しい支援経過を把握し分析し、次の有効な支援につなげる支援ツールを開発することができ、そのことによって、引きこもり等の社会的孤立状態にある当事者に対する新しい支援アプローチを開発することができ、現実の支援につながることで適応的に暮らすことができる当事者を増加させていくことができると期待される。支援が広く行われるよう、支援手法に関するマニュアルを作成し公開する。また、彼らに対して交流の場を用意することで予防的な活用が可能になり、「親亡き後」に悩む年若い保護者も含め、ひとり暮らしを希望する当事者を実際の独り暮らしにつなげていく効果を持つと考えられる。このことは、「親亡き後」に悩み、親子心の中リスクがある家族に対して必要な現実的な希望を示すことにもつながると考えられる。

### 2-2. 中間達成目標

中間達成目標としては、実際に運用するためのアプリの開発が中核となる。その後、国内の各地で実証検証ができるアプリの開発と、運用を可能にするマニュアルや仕組みの開

発を行う。アプリケーションとして以下の機能を含んだものとなる予定である。

発達障害青年・成人の以下のスキルチェックのプロトタイプの開発

- ・生活スキルチェックアプリの改訂版
- ・社会的スキルチェックアプリ
- ・就労ソフトスキルチェックアプリ
- ・メンタルヘルスチェックアプリ
- ・支援者の支援情報の蓄積モデルの導入

当初の半年から1年で、発達障害当事者に協力してもらって、開発を進めていく。実際に、発達障害当事者が活用した機能をさらに検討し、バージョンアップを重ねていく。一方で、日常生活スキル、就労ソフトスキル、余暇支援、メンタルヘルスの把握等に関して、実態を反映したアプリでの評価になるのかを検証していく。

実際に運用するためのアプリの開発は進んでおり、東京、徳島、石川の三カ所に加え、静岡、宮城、神奈川、鹿児島、北海道の五カ所で実証検証を行った。今後、さらに実証検証する地域を増やしていく予定である。生活スキルや社会的スキル、就労ソフトスキル、メンタルヘルスをチェックできるように開発し、実際に発達障害青年・成人の当事者にチェックを行ってもらっている。

## 2-3. 実施内容・結果

### (1) 各実施内容

今年度の到達点①（目標）

発達障害青年成人が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプの開発を行う。

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

前年度に開発したアプリの日常生活支援（余暇支援）機能とスキルチェックアプリ機能（日常生活スキル、就労ソフトスキルやメンタルヘルス等）を、実際に発達障害成人青年に試用してもらいつつ、当事者の支援に取り組む全国の専門家たちや支援現場職員たちからの知見の収集や意見交換を行い、実際に活用しやすいアプリの開発を進めていく。各グループから追加・修正すべき機能や項目についての意見を出し合い、アプリのバージョンアップを進める。2019年中に、実際に活用できるアプリのプロトタイプの完成を行う。（マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G）

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

支援者が活用しやすいように、当事者の評価と支援者の評価を比較しやすくするとともに、支援者の評価や取り組みを、現場での支援記録として保管していく仕組みについての支援者の意見を基に、実際の結果のアウトプット形式や入力形式の開発を行う。福祉、医療、就労支援等の各領域に合ったアウトプットや入力の様式になっているのかどうか、意見を出し合い、実際のデータベースの積み上げの仕方などについて検討を加える。その際に、個人情報の保護には十分留意していく。2019年中の試行をする。（マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G）

## 今年度の到達点②(目標)

妥当性と信頼性のある発達障害青年成人のアプリ評価の確立。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の確立をする

実際の標準的なアセスメント・ツールとの関連性の中で、今回のアプリでの評価が十分に妥当なものになっているのか適応行動を中心に検証し、確立する。全国の協力施設や関係団体（20か所（北海道から鹿児島まで全国にわたる））にアプリを配布し、実際のデータの収集を行う。就労移行に関しては全国に事業所があるLitaLico等を受け皿にしたトライアルを行う（全国10か所程度）。また、生活支援に向けては地方自治体や全国の発達障害者支援センター等（あるいは大学の障害者支援室等を含む）と地域の親や支援者のネットワーク（全国10地区）等と協力して、アプリによる生活やメンタルヘルス等の1000人規模の大規模把握を行う。また、生活困窮者支援機関等においても同様の把握を行う（全国5か所程度）。年度内に各々のカテゴリでのイベントに合わせる形で複数回のセミナーを各地で実施していく。セミナーを受けて、協力してもらえらる機関ごとでアプリの利用を推進していく。アプリを活用する支援者たちでのミーティングを並行して実施し、成人発達障害者の支援を、アプリを通じて発信できる仕組みを取り入れていく。開発チームが厚労省等と連動しながら、障害者福祉・生活困窮者支援・就労支援・民間団体による生活支援と社会性・余暇支援というような必要な仕組みを、アプリを軸にして整理していく形を構想している。（マネジメントG、アプリG、NPO生活G）

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に使い、活動のバリエーションを拡げる

発達障害当事者の余暇活動の実態把握をアスペ・エルデの会以外に広げるとともに、アプリを用いた余暇活動の有効性を、実際に余暇活動に活用しつつ、データの収集を行う。（マネジメントG、アプリG、NPO生活G）

実施項目②-3：実態把握に基づくアプリの試験運用

アプリを全国の他地区で運用し、より継続できるための運用方法の検討を行う。そのための収益モデルや、更新、新機能の追加についても検討を行い実践する。（マネジメントG、アプリG、NPO生活G）

## 今年度の到達点③(目標)

プロジェクトについての広報啓発

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらった事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（全国8か所；横浜、東京、名古屋、熊本、奄美、旭川、東京、金沢）。就労移行に関しての全国でのトライアルの様子や、生活支援における地方自治体や全国の発達障害者支援センター等（あるいは大学の障害者支援室等を含む）と地域の親や支援者のネットワーク等と協力して、各地でのトライアルの様子を発信していく。また、生活困窮者支援機関等においても同様の実施と発信を行っていく。各々のカテ

ゴリーでのイベントに合わせる形で複数回のセミナーを各地で実施していく。セミナーを受けて、協力してもらえる機関ごとでアプリの利用を推進していく。アプリを活用する支援者たちでのミーティングを並行して実施し、成人発達障害者の支援を、アプリを通じて発信できる仕組みを取り入れていく。また、実際のアプリを用いた支援についての報告を行い、支援者たちがアプリを活用するメリットの理解啓発をするとともに、支援者側・事業所側の使用におけるニーズを把握する機会とする。実際に複数個所での実施例を報告してもらおう。今後の社会実装に向けて、ネットワークを拡げていくための機会とする。(マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G)

## (2) 成果

### 今年度の到達点①(目標)

発達障害青年成人が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプの開発を行う。

#### 実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

成果：

アプリは引き続きプロトタイプを開発した。実際の現場で使用されやすくなるため、実際に現場へ向かうスタッフなどと意見交換をしながら管理システムを大幅に更新した。まずユーザ管理は施設管理者レベルの権限を設け、ユーザの追加や削除をできるようにした。このユーザ追加には、支援者の追加機能や権限レベルの変更も実装され、職員の異動に対応できるようにした。

次に、実証試験で現場の方から支援者のチェック結果を本人へ表示したくないとの希望があり、結果の表示設定を施設ごとに変えられるようにした。また、管理者は各個人のイベント参加結果やチャットの回数など、アプリ内でのアクティビティを確認できるようにした。これにより、イベントにはチャット参加なのか、実際に参加したのか、チャットの回数、何回イイねをしたか、されたかを確認できるようにした。プライバシーに配慮し個別の内容はみられないが、こういった気持ちでイベントに参加したかその雰囲気をつかめるようになった。

新型コロナの影響を鑑み、全国横断的にイベントが作成できるように技術的調査を行ったが、プロフィールに本名を使用している、直接コミュニケーションをとるといった懸念もあり実装には慎重を要すると判断した。

#### 実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

成果：

また、各チェックは精度を高めるためにチェック間隔を設けユーザがログインし



図 2-1 管理中の画面



図 2-2 プロフィール画面

た際にすべきチェックを自動提示するようにした。これにより、変化がおきにくいチェック項目については間をあけてチェックすることができ、チェックを飽きさせにくいようにした。

また、様々なチェック結果から優先すべき課題を見つけやすく実装した。これにより、家族では気づきにくい課題、学校や施設などで気づきにくい課題を直感的にわかることができる。そのため、本人を取り巻く人々が共通の認識を持ち、課題解決につながりやすい。また、適切な使い方をすれば本人自身が自分でも気づいていない課題に気づくことができ、課題解決に向けて同意を得られやすいと考えられ、さらなる支援の質向上を期待できる。

ただ、この開発については2020年初頭にも使用度を確認する機会を検討していたが、新型コロナの影響もあり直接面談を避ける必要があるため、2020年に継続して実装をすすめたい。

## 今年度の到達点②(目標)

妥当性と信頼性のある発達障害青年成人のアプリ評価の確立

実施項目②-1: アプリによる評価の妥当性の確立をする

成果:

アプリによる評価の妥当性の確立については、余暇活動支援機能を社会性の支援等に使用していくことで検討を進めた。2019年8月に愛知県南知多町日間賀島にて行われた発達障害児者の支援合宿の社会的支援プログラムにおいて、余暇支援アプリを用いた社会的スキルトレーニングプログラムを企画した。プログラムは8月16日～19日の3泊4日の合宿中にて行われた。対象者は、NPO法人アスペ・エルデの会会員メンバー8名(男性8名)である。年齢は高校生年代から社会人年代であった。プログラム参加としては対人不安があり、コミュニケーション能力の向上を当事者本人が持っていた。

初日のプログラムは、メンバー同士および担当スタッフの自己紹介等を行った。メンバーには同年代のメンターになりうる担当学生スタッフがついた。学生スタッフには事前研修にて、当事者が抱えやすい社会性の課題やプログラムの事前説明を受けて合宿に臨んだ。その際に初日において担当メンバーと実際に関わりながら社会的スキルや課題となるところについて随時観察をしてメモしておくよう依頼し、合わせてプログラム内で成長した・改善した点も後に記録してほしい旨、依頼を行った。

プログラム開始時には、当事者同士でアプリのイベント企画を行ううえで必要な社会的スキルやコミュニケーションスキルについて、プログラムディレクターが心理教育を行った。具体的な内容として、例えば集団で発言者に聞く際の望ましい姿勢と態度などのスキルについて取りあげた。また、各自自分のスマートフォンや貸し出し用のタブレットを用いて、一般的なソーシャルネットワークサービス(以下、SNS)と類似した機能のあるアプリを使用するので、SNS使用の一般的な注意点についても取り上げた。

2日目は、日間賀小学校に移動し、スマートフォンやタブレットのカメラ機能を利用して自分が思う日間賀島の絶景写真を撮って、アプリのチャット機能にアップするように課題を与えた。チャット機能を使って、それぞれの写真にコメント

や承認する・評価するようなスタンプといったコミュニケーション行動について促した。大学生スタッフはモデリングの役割を行い、ディレクターはコミュニケーション行動が適切であることを評価した。夜のミーティングでは各グループの発表とうまくやれていた点などを共有した。

3日目の午前中は、午後からの活動を計画するためにメンバーで話し合いを行い、スイカ割り、サイクリング、カフェ巡りなどのグループに分かれた。それぞれグループごとに分かれ、自発的にアプリ内でイベントを作成し、チャット機能を使いながら詳細を決めていった。直接目を合わせて会話するよりも、チャットで会話する方が自分の意見を言えているメンバーもあり、チャット機能を使うことでスムーズに話し合いが進められていた。実際の活動中は、それぞれのグループがチャットに写真を載せながら報告し、違う活動をしていながらも楽しさを共有することを経験していった。

まとめとして、余暇支援アプリを用いてコミュニケーションスキルのプログラムを試行した。筆者らの臨床的な感覚では、社会的スキルの枠組みで、イベント企画から参加意思表示、諸連絡および確認、SNSとしての共通の関心やイベントそのものの共有を視覚的に示すことが出来、かつ支援者がイベントの楽しみ方等をスーパーバイズや評価できる形になっている点が臨床的に有用な点であると思われる。

実施項目②-2： 余暇活動支援機能を実際に使い、活動のバリエーションを広げる  
成果：

余暇活動支援機能を実際に使い、活動のバリエーションを広げる試みのなかで余暇アプリによる支援効果の統計的検討等を行った。②-1の余暇支援アプリを用いた社会性支援の実践研究の結果から報告しておく。2018～2019年の2年間で統計的検討が可能なデータ数に達したため、2年間のデータ分析から成果を報告したい。

本プログラムには、2018～2019年にかけて延べ15名が参加した。これらの参加者のうち事前調査と事後調査の両方の結果が得られた14名(男性13名、女性1名)を分析対象者とした。対象者の平均年齢は17.64歳(SD=3.84)であった。なお、参加者児童全員が児童精神科医または小児科医によって広汎性発達障害、アスペルガー障害、自閉症のいずれかの診断を受けていた。

プログラムの評価には、旭出社会適応スキル尺度(肥田野、2012)のコミュニケーション因子と心理的居場所感尺度(則定、2008)の被受容感因子と精神的安定因子を用いた。双方とも数値が高いほどそれぞれの特性が高いと判断される。旭出社会適応スキル尺度は学生スタッフによる評価であり、担当メンバーの社会的スキルに関する観察記録も併せて回収した。

心理的居場所感尺度は被受容感と精神的安定については、有意差は認められなかった。本データの特徴として事前評価の段階から被受容感と精神的安定因子の得点が高かった点である。本参加メンバーは本支援合宿に何度も参加しているということと関連しているように思われた。

表1 余暇支援アプリを用いたコミュニケーション  
プログラムの事前事後調査の結果

	事前調査		事後調査		t値	効果量d
	平均	SD	平均	SD		
被受容感	22.14	4.38	23.43	5.06	-0.99	0.3
精神的安定	30.57	5.71	32.5	7.2	-1.125	0.34
コミュニケーション	12	3.92	14.57	3.8	-3.479**	0.66

\*\*…p<0.01

表1のうちコミュニケーションスキルについては、1%水準で有意な向上を示した。プログラム内にて3分の1にあたる3名以上が改善を示したコミュニケーションスキルの項目を列挙すると以下である。「適切に視線を合わせ、あいづちを打つ」が5名、「会話を適切に終わらせる」が3名、「個人的な情報をむやみに教えない」が3名であった。自由記述による評価では、「会話の締めくくりがはっきりとしてきた」、「周囲を意識するようになった」、「相手の話に聞く耳を持つようになった」、「自分から話題を出したり、質問することができるようになった」など見られるようになった。

本プログラムでは、コミュニケーションスキルにおいて有意な向上が認められた要因として会話のスキルトレーニングの練習効果と考えられるが、練習効果をより高めるための以下のように余暇支援アプリの要因があったと考えられる。

プログラム初日に会話におけるコミュニケーションスキルについての心理教育を行い、その後、余暇支援アプリを用いて、当事者メンバーで何度もイベントを企画してコミュニケーションの実践を行った点である。学んだスキルを何度も練習したり、実行してみる機会が多かったことである。さらに環境要因として大学生スタッフやプログラムディレクターが、参加メンバーへの心理教育で話題になったコミュニケーションスキルを使っていたときには積極的に「〇〇が先ほどの会話でうまく使えていた」とリアルタイムでのフィードバックを行っていた。これまでの日常生活では対人関係では失敗体験も多く重ねており、対人緊張の高いメンバーもいたが、本プログラムの背景要因もあり、安全でかつ必要なコミュニケーションスキルの実践練習の場となったと考えられる。

### 実施項目②-3：実態把握に基づくアプリの試験運用

成果：

上記、②-1、②-2等の検討を受け、アプリの試験運用を進めている。アプリの試験運用において、全国での実施のなかで地域の支援者からの要望を受け、イベント機能を含めたアプリの使用を行う場合と、イベント機能なしでチェック機能だけで試用する場合の両方があった方がいいことが指摘され、支援

者の使用する結果のアウトプット様式の修正以外に、両方でのアプリの配布の仕方について検討することになった。

今年度の到達点③(目標)

プロジェクトについての広報啓発

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

成果：

アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での活動実施の際に、各地でのアプリを活用した発達障害青年成人当事者支援についての広報イベントを実施した(全国6か所;名古屋、静岡、仙台、横浜、奄美大島、旭川)。6か所で計50名ほどに参加していただき、実際にアプリを使えるように説明し生活チェックなどを実施してもらった。

また、2019年11月に研究開発のためのセミナーを二回実施し、アプリを用いた支援についての広報活動を行った。その際に、全国で実施した広報イベントについての簡単な報告も行った。

(3) スケジュール

実施項目	平成29年度 (H29. 10～ H30. 3)	平成30年度 (H30. 4～H31. 3)	平成31年度 (H31. 4～R2. 3)	令和2年度 (R2. 4～ R3. 3)
			マイルストーン	
発達障害者実態調査	←		→	←
アプリ開発	←		→	
アプリの試験	←		→	
利用実態の分析	←		→	
アプリの提供			←	→
現実的な支援の提供			←	→
現実的支援の関連性分析				←
支援マニュアルの作成				←
支援の有効性の評価				←

#### (4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

発達障害青年成人が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプの開発を行い、実際に全国で5カ所訪問しアプリを使用してもらった。今後さらに多くの地域で使用してもらうよう訪問をする予定である。当事者団体だけでなく、病院のデイケアや福祉事務所でも使用してもらい、職員からの意見を聞くこともできた。アプリを使用する本人だけでなく、支援をする職員や保護者にとっても使いやすいものとなるようさらに検討が必要である。

次年度に向けた課題として、記録するシステムの作成と個人情報の取り扱いの二点が挙げられる。個人情報については、登録の仕方や通知の送り方、パスワードを忘れたときの対応についてなどを考えていく必要がある。今後、研究会等に参加し相談をしながら取り組んでいく予定である。

#### 2-4. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
R1/11/16	成人期の発達障害などの人たちの地域生活サポート手法に関するセミナー 企業就労してからさらに地域での生活を支えるために	第一アメ横ビル	アプリ開発についての報告と共に、福祉現場で働く支援者から現状やアプリ使用についての報告がされた。当事者の意見も交えながら、アプリ開発について意見交換を行った。
R1/11/17	成人期の発達障害などの人たちの地域生活サポート手法に関するセミナー デイケアや外来診療と地域での生活をつなげるために	第一アメ横ビル	アプリ開発についての報告と共に、医療現場で働く支援者から現状やアプリ使用についての報告がされた。当事者の意見も交えながら、アプリ開発について意見交換を行った。

### 3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

静岡、仙台、横浜、奄美大島、旭川の5か所でアプリの説明会を実施した。各地で生活チェック機能とお出かけ機能の使い方を説明し、実際に使ってもらった。保護者も一緒に参加してもらった場合は、生活チェックを確認できるように利用者とペアになってもらった。また、アプリ内でのイベント作成の仕方や、チャットの使い方を説明し実際に使ってもらった。アプリを実際に使用した後に、当事者から意見を聞くと同時に保護者や支援者からもどうすれば普及につながるかについて意見を出してもらった。

今年度は、当事者団体だけでなく、病院のデイケアや福祉事務所でも使用してもらった。年齢によってはタブレットの使用が難しかったり、一人での実施が難しく支援者の付き添いが必要だったり検討するべき点はいくつか上がってきたが、今後改善をしていきさらに多くの地域で実施する予定である。

プロジェクトとしては、アプリについて全国的に公開し、多くの人たちに使ってもらう形での広報を次年度当初よりスタートし、より多くの人にアプリを使ってもらうとともに、発達障害成人の地域生活支援を行えるための社会的な仕組みづくりを提案していく準備を行

っている。全国の当事者団体等でのネットワークをより強固にしつつ、社会福祉領域等で支援に取り組む支援者が支援の基本的な枠組みを学べる窓口ともなりうるよう、セミナー等で普及に取り組んでいく予定である。

## 4. 研究開発実施体制

### (1) マネジメント・福祉グループ

#### 辻井正次（中京大学現代社会学部・教授）

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプ completion と活用

グループ役割の説明：マネジメントグループはアプリ開発において、アプリの開発状況と実際の当事者の利用状況とを照合し、当事者からの要望や支援者からの要望を調整し、アプリ開発が順調に進むように調整を進めていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループ役割の説明：アプリを活用して蓄積していく支援記録を、効果的な支援の開発につながるような形式に保存し、実際に支援者が支援記録になるようにアウトプット可能な形にしていく取り組みを行っていく。各グループで上がってきた課題をアプリグループと調整しつつ、形にしていく。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の確立をする

グループ役割の説明：メンタルヘルスや適応行動、職場でのソフトスキル等の、スキルの評価を、既存の標準化された心理検査との妥当性を検討していくことで、実際に活用できるアプリの中の評価項目を開発する。

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に使い、活動のバリエーションを拡げる

グループ役割の説明：当事者の支援活動にアプリを持ち込み、アプリを活用した支援の有効性や課題を抽出していく。実際の活動とアプリ開発との調整をマネジメントしていく。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループ役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（アスペ・エルデの会のSNSなどを通じた発信を行った）。さらに、年度末に活動の報告としてシンポジウムを開催し、アプリの広報を含め、アプリを活用した支援についてのシンポジウムを行い、実際のアプリを用いた支援についての方向を行い、支援者たちがアプリを活用するメリットの理解啓発をするとともに、支援者側・事業所側の使用におけるニーズを把握する機会とする予定であったが延期となった。会のマネジメントを行う。

### (2) アプリ開発グループ

#### 曾我部哲也（中京大学工学部・准教授）

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：本グループは、発達障害青年成人が活用するアプリの開発を担っていく。他のグループから開発に必要な知見を集め、引き続き開発を継続する。特に利用者が使いやすいような仕組みに注力したい。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリでのデータの蓄積や保管様式について検討してきたが、他の研究者が解析しやすい出力形式などを検討する。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の確立をする

グループの役割の説明：引き続き他のグループと連携し、データを蓄積していく。また、評価項目のカスタマイズ性についても利用する現場の意見を聴取するなどして検討をおこなう。

実施項目②-3：実態把握に基づくアプリの試験運用

グループの役割の説明：アプリを全国の他地区で運用し、より継続できるための運用方法の検討を行う。そのための収益モデルや、更新、新機能の追加についても検討を行い実践する。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体などで、アプリの使用やその効果などについて説明や周知をおこなう。また、HPなどで周知し、広報イベントなども適宜実施する。また、当事者のスキルアップイベントの実施を検討し、より魅力的なスキルアップコンテンツなどを開発、パッケージ化を目指す。

(3) 就労支援グループ

**井上雅彦（鳥取大学医学部・教授）**

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：適応の重要な側面である就労において、就労のための社内ルールや社内での人間関係等の視点から取りまとめられた「ソフトスキル」のチェック機能をアプリに付加する等、アプリ開発に寄与する。ジョブマッチング等への展開も考えて、項目と仕組みに関しての提案を行う。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリでの支援記録の管理する一方、就労の現場に対して、どういう項目をどのように現場に返していくのかも検討していく。企業でも活用可能なアウトプット様式の開発を目指す。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事

業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（全国8か所；横浜、滋賀、熊本、仙台、旭川、東京、金沢）。また、年度末に活動の報告としてシンポジウムを開催し、就労支援や企業での支援と生活支援の関連性など、知見を報告し、アプリを活用した支援の有効性について検討する。

#### (4) 医療機関との連携構築グループ

##### **鈴木勝昭（小笠病院・院長）**

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：本グループは、発達障害成人が合併しやすい、不安症状や抑うつ状態の合併への対応をしていくことで、適応状況が悪化することを医療的な視点で対応していくために、必要情報をアプリに盛り込む。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：薬物療法や服薬管理支援など、医療的な支援を、発達障害者向けのデイケアなどで、アプリを用いた取り組みを行う。そこでの成果から記録や保管、アウトプットのやり方に関して、提案を行う。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（アスペ・エルデの会のSNSなどを通じた発信を行った）。また、年度末に活動の報告としてシンポジウムを開催し、メンタルヘルスや医療機関での支援と生活支援の関連性など、知見を報告し、アプリを活用した支援の有効性について検討する予定であったが延期となった。

#### (5) NPOと生活支援グループ

##### **宮地菜穂子（NPO法人アスペ・エルデの会・事務局長）**

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：実際に現実の支援グループを運営し、アプリの活用状況について把握していくとともに、当事者からも必要な機能ややりたいことを聴取し、アプリ開発につなげていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：当事者自身が自分の記録を把握し、適応状況を改善していくために、記録の保管の仕方や、必要な情報の提示、個人情報の保護など、活動の中での意見集約を行い、アプリの機能に付加していくための提案を行う。

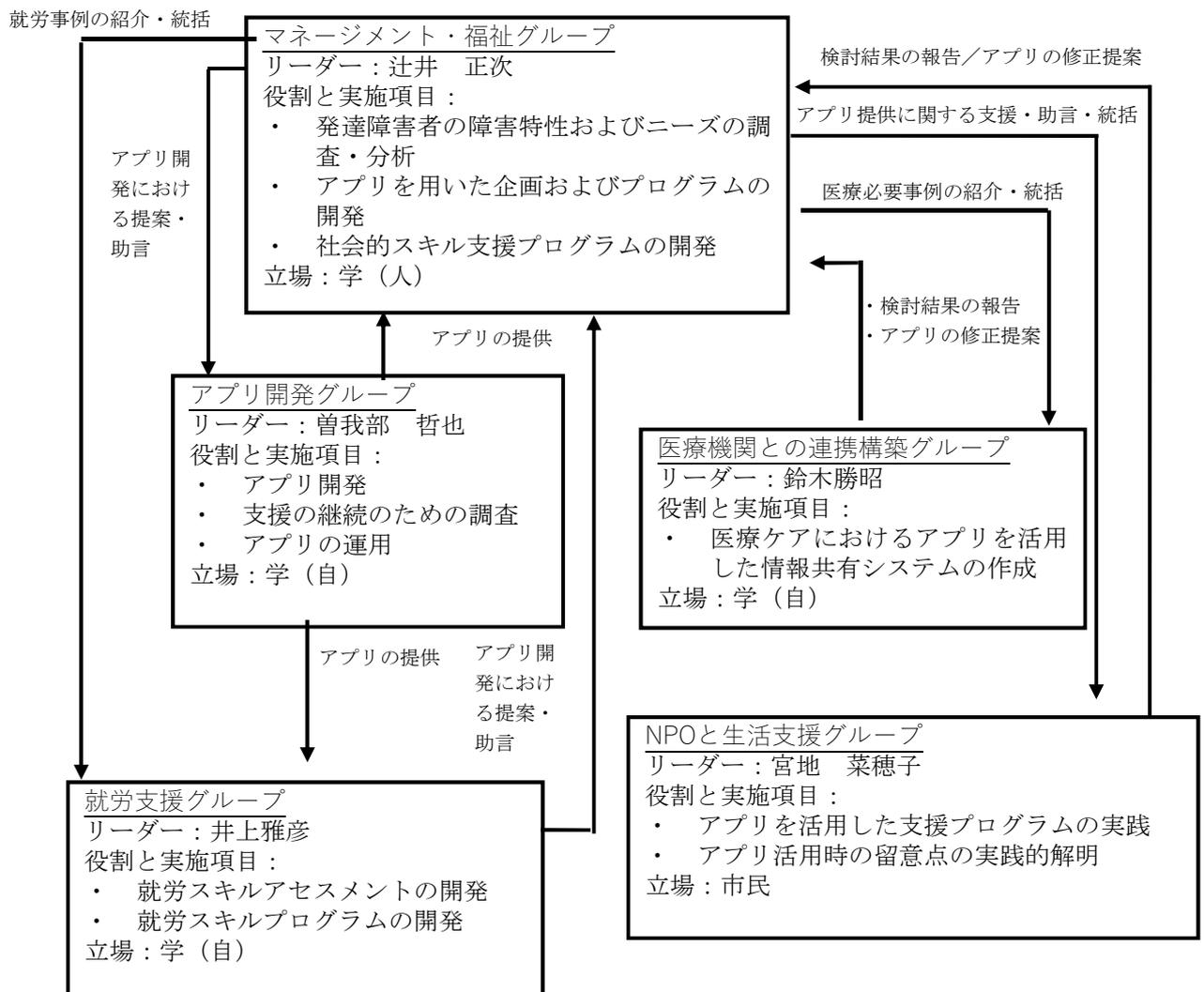
実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の確立をする

グループの役割の説明：メンタルヘルスや適応行動、職場でのソフトスキル等の、スキルの評価ができるよう、継続的なアプリの使用を持続してもらうよう、全国の

関連団体と連絡を取りつつ働きかけ、また、各地の支援者からの評価を回収していく。

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に使い、活動のバリエーションを拡げるグループの役割の説明：発達障害当事者の余暇支援情報の収集や、関係団体の連絡調整等を行う。適応行動のなかでも、成人にとって重要度が高い、余暇活動や、余暇活動を通じた他者とのつながりづくりのバリエーションを把握し、アプリ開発と支援手法開発につなげる。アプリを用いた支援を試行し、その有効性を検証する。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（アスペ・エルデの会のSNSなどを通じた発信を行った）。また、年度末に活動の報告としてシンポジウムを開催し、余暇活動の実態やそこでの課題等を明確にし、アプリを活用した余暇活動の可能性に関して、実際の試行を踏まえて、知見を報告し、アプリを活用した支援の可能性について検討する予定であったが延期となった。



## 5. 研究開発実施者

### マネジメント・福祉グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
辻井正次	ツジイマサツグ	中京大学	現代社会学部	教授
明翫光宜	ミョウガンミツノリ	中京大学	心理学部	准教授
伊藤大幸	イトウヒロユキ	中部大学	現代教育学部	講師
黒田美保	クロダミホ	名古屋学芸大学	ヒューマンケ ア学部	教授
香取みずほ	カトリミズホ	中京大学	現代社会学部	研究支援員
中島卓裕	ナカジマタカヒロ	中京大学	現代社会学部	研究支援員

### アプリ開発グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
曾我部哲也	ソガベテツヤ	中京大学	工学部	准教授
和田三千穂	ワダミチホ	(株)ベイビー		代表取締役
西岡克真	ニシオカカヅマ	中京大学	工学部	特任研究員

### NPOと生活支援グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
宮地菜穂子	ミヤチナオコ	NPO法人アスペ・エ ルデの会	事務局	事務局長
浜田恵	ハマダめぐみ	名古屋学芸大学	ヒューマンケ ア学部	講師
田中尚樹	タナカナオキ	厚生労働省		

### 就労支援グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
井上雅彦	イノウエマサヒコ	鳥取大学	医学部	教授

高柳伸哉	タカヤナギノブヤ	愛知東邦大学	人間健康学部	助教
榎本大貴	エノモトタイキ	Litalico研究所		研究員

医療機関との連携構築グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
鈴木勝昭	スズキカツアキ	小笠病院		院長
片山泰一	カタヤマタイチ	大阪大学・金沢大 学・浜松医科大学・ 千葉大学・福井大学 連合大学院	連合小児発達 学研究科	教授
中村和彦	ナカムラカズヒコ	弘前大学	医学部	教授
杉山登志郎	スギヤマトシロウ	福井大学	医学部	客員教授
森則夫	モリノリオ	福田西病院		院長
石川道子	イシカワミチコ	海南病院	小児科	医師
野村昂樹	ノムラタカキ	医療創生大学		臨床心理士

## 6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動等

### 6-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2019年 11月16 日	成人期の発達障害などの人たちの地域生活サポート手法に関するセミナー～企業就労してからさらに地域での生活を支えるために～	第一アメ横ビル第2会議室(愛知県名古屋市中区大須3-30-86)	40人	一般企業での障害者雇用枠等での就労をしている発達障害成人当事者の地域生活の中での課題に関して基調講演で問題提起したのちに、当事者を交えた意見交換を行った。「親亡き後」に向けて、一人暮らし支援等をどういった枠組みで行うのか、そのためにアプリ等では何か議論を行った。
2019年 11月17 日	成人期の発達障害などの人たちの地域生活サポート手法に関するセミナー～デイケアや外来診療と地域での生活をつなげるために～	第一アメ横ビル第2会議室(愛知県名古屋市中区大須3-30-86)	40人	医療現場の中で、特に精神科外来やデイケアのなかで、どのような適用の可能性があるのか、アプリ等での日常生活支援の可能性について意見交換を行った。当事者が使用する観点で、日常生活や家庭生活をどのようによりよく保っていくのか、当事者も参加して意見交換を行った。

### 6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

- (1) 書籍・冊子等出版物、DVD等
- (2) ウェブメディアの開設・運営
- (3) 学会(6-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等
  - ・令和元年度発達障害者地域生活・就労支援研修会 辻井正次・明翫光宜「成人期以降の地域での支援」
  - 2月13日 国立リハビリテーションセンター(厚生労働省の研修)

### 6-3. 論文発表

- (1) 査読付き(   1   件)
  - 国内誌(   1   件)
    - ・曾我部哲也・伊藤大幸・明翫光宜・中島卓裕・高柳伸哉・浜田恵・香取みずほ・西岡克真・辻井正次. 自閉スペクトラム症成人の生活支援のアプリケーション開発の試み. 臨床精神医学, 48, 985-995. 2019.
  - 国際誌(        件)

(2) 査読なし ( \_\_\_\_\_ 件)

#### 6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 \_\_\_\_\_ 件、国際会議 \_\_\_\_\_ 件)

(2) 口頭発表 (国内会議 \_\_\_\_\_ 件、国際会議 \_\_\_\_\_ 件)

(3) ポスター発表 (国内会議 \_\_\_\_\_ 件、国際会議 \_\_\_\_\_ 件)

#### 6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 ( \_\_\_\_\_ 件)

(2) 受賞 ( \_\_\_\_\_ 件)

(3) その他 ( \_\_\_\_\_ 件)

#### 6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (  1  件)

(2) 海外出願 ( \_\_\_\_\_ 件)